
水部～心のちやぶ台

草場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水部く心のちゃぶ台

【Nコード】

N7492M

【作者名】

草場

【あらすじ】

カオちゃん、水部を発足した。

水泳部とも、水質研究部とも違うらしい。

「みずぶう？」

「そ」

この学校は生徒の自主性を重んじるとかなんとかで、たった一人でも部活を始めることが出来る。部費もちゃんと出る。1ヶ月最低105円。人数や活動内容によって、増えたり減ったりする。条件はただ一つ、活動内容報告書を定期的に提出すること。書かないと部費は没収。ちなみに、校内の自販機は、一律110円。外よりも10円くらい安いけどね。

「水泳部とかじゃなくてえ、水部？」

「そうよ。水泳部は別にあるでしょ」

「水質研究部・・・みたいなの？」

「それも、もうあるわよ」

いつも力才ちゃんを追いかける。彼女はいつも早足。彼女はいつも美人で、自信家で頭もいい。彼女はいつもよくわからない。よくわからない彼女といつもつるんでいる自分自身、よくわからない。頭も悪い、容姿は普通だ。

「えー、じゃあ、水部ってなにすんのぉ」

「水泳部は水泳、水質研究部は資質研究。だったら水部は水します」
水をする。みずをする？みずってするもの・・・だっけ？

「え、みずって・・・なにすんの？」

「だあっ！だーからー！みず！みずするって言ったでしょ！」

だーからーそれがわかんないんじゃないじゃあぁー！！

と、心の中でちやぶ台をひっくり返す。対力才ちゃん仕様のちやぶ台は、もう何度も心の中でひっくり返っている。

「よく、考えなさい！放課後までに！」

学生の本分は学業なのに、身が入りませんでしたあ！バカが余計

バカになるわ！

水を頭から被る部活？コップに入った水をひたすら眺める？活動報告書には、今日の波紋は・・・とか書くわけ？なんかこう、水っぱいものをぶにぶにする。ゼリーとかサンショウウオとか。くらげとか。いろんな場所の水を飲み比べる。今日の硬質はまた一段と硬いですなあ！！そうですね！そんな会話を繰り返してみたり。

放課後、カオちゃんに自分の考えを伝えてみる。心の中のちやぶ台は、今日一日で沢山ひっくり返った。壊れないのが不思議だ。あ、想像の産物だから壊れないか。心の中は丈夫に出来ている。

「そう、じゃあいきましょう」

「プールですか？」

「温泉に見える？」

水着に着替えて、といわれる。

「今日、もうプールあったよ？」

とりあえず持ち歩いていた鞆の中に、水着は入っている。今日はプールの授業があったのだ。

「水着、濡れてるし」

「水道水で洗えば、気持ち悪くないわ」

冷たく濡れた水着を着るのは抵抗があったが、まあ生暖かくてよくわからない水着よりかはましだった。

二人とも着替え終わると、プールへ向かった。プールに入る前の儀式である消毒風呂（自分たちはこう呼んでいた）をよけて、シャワーに向かう。カオちゃんが蛇口をひねる。頭から水を被る。すぐに放水がやむ。

「よし」

なにが、よし、だ？

カオちゃんが歩いて行ってしまったので、慌てて付いていく。つて、アレ？

「ちょ・・・プール入るんじゃない・・・」

「なに言ってるの、任務は完了よ」

着替えて、タオルで頭をガシガシ拭いた。二度目のタオル・・・複雑な気分だ。

教室に戻ると、もちろん誰もいない。部活か帰宅。まあ、それもそうだよなあ。今日の生徒の浮かれ具合は、羽根とプロペラをつけた風船みたいなもんだ。

コン。と綺麗な音を立てて、コップが置かれる。何の装飾も無いガラスのコップだ。いつの間にか消え、いつの間にか教室に戻ってきていたカオちゃんがいた。

「さて、私が戻ってくるまで、観察してなさい」

「え、カオちゃん、どこ行くの？」

「ちよつと、そこまで」

飲まないですよ？と言いつつ残して、カオちゃんは消えた。

傾きかけたはずの太陽だけれど、教室の窓から直接は入り込まない。それでも濃い影を作る光は、コップの中で複雑に反射して、見る角度を変えるたびに別の表情を見せる。氷は入ってないけれど、コップの表面には、結露が付き始める。それを乱さないでいようと思う。ちゃんと”観察”している証拠に。

「よくみたあ？」

「飽きるほど・・・カオちゃん。なんなのお」

「ハイ。これ食べましょ」

ゼリー。

「105円です」

「まさか」

「部費よ」

使っちゃったのかよー！

それぞれにプラスチックの小さなスプーンを持ち、向かい合って一つのコップからゼリーをすくった。カオちゃんはそれを目の高さまで上げた。

「プルプルですなあ」

「まさしく」

「あと、これ見なさい」

鞆から取り出したるは、大きな本。薄緑の小さな付箋がはみ出ている。

「これがサンショウウオです。で、こっちがクラゲね。プルプルですなあ」

「つぶらな瞳ですなあ」

ゼリーを食べ終えると、ゴミを捨てて、立ち上がる。

「いくわよ」

「本は」

「休み明けに図書室に返せばいいのよ」

あんな重い持ち歩きたくないわ。と教室をでた。

追っていき、質問を開始する。

「ねえ、もしかして、さっき俺が考えたこと、全部実行するの?」

「あーら、やっと気づいたのね」

彼女は水のみ場まで歩くと、蛇口を上上げて豪快に水を飲んだ。もちろん俺も飲んだ。いくつかの水のみ場を回り、もうお腹いっぱい。

「硬水ですなあ!」

「少しカルキ臭いですなあ!」

「よし!ではこれにて水部解散!」

はああああ。いや、もうちゃぶ台ひっくり返ったまま、元に戻らなくなってるよ。

「これ、レポートどうするんですかあ?部費も絶対没収だよねえ」

「まあ、嘘だけどね?」

「え」

「ゼリーは、120円でしたー!。ふたに書いてあったでしょ?観察能力不足ー」

水部発足の書類は学校に提出されずに、彼女の鞆の中に入ってい

た。なんか、婚姻届を出し忘れられた気分だ・・・。

ちやぶ台を直す気力もありません。

「なんだってこんなこと」

「・・・だ・・・」

「んー？」

「・・・だつて、明日から夏休みでしょ」

あーあーへーふーんほー、わかつちゃった。俺の彼女さんの心情はわかつちゃいましたよ。

「もぉ・・・とりあえず、明日プール行きましょ。俺ちゃんと準備してありましたー！」

「む」

カオちゃんは、差し出した前売り券をにらんだ。

「その次は、俺んちの近くの公園で祭りあるし、次は学校近くの大通りで大規模な祭りー。カオちゃんちの近くは、なんかないの？」

「ぬうう、あるわよ。次の次の日曜よ」

「浴衣必須」

「・・・受けて立つわ」

毎日会える学校生活が一区切り。夏の暑い校門の外には、昨日とは違う開放感が漂っている。これは昨日まで歩いた道じゃない。制服を着ていた自分と私服の自分は、やっぱり何か違う。

「俺はぁ、もずううーっ！と！楽しみだったんですけどねえ。ねえ、カオちゃん」

夏休み直前。俺の心の中のちやぶ台は、ひっくり返りっぱなしだったけど、最後に彼女のちやぶ台もひっくり返せたかな。ね。と顔を覗くと、真っ赤になって目をそらすのがその証拠だと思いました！

(後書き)

学園コメディ恋愛モノツぽいもの。

→

→

→

みつつとも、総じてぬるい結果に。

ちゃぶ台は突っ込みの象徴です。SかMが言われれば、M系・・・。
Sになると、ハリセンが与えられます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7492m/>

水部～心のちゃぶ台

2010年10月8日14時01分発行